

農の架け橋 地域と共に

—白子町農業委員会だより NO. 11—



平成30年8月
編集・発行／
白子町農業委員会

農業委員及び農地利用最適化推進委員を皆さんに紹介します。

ながいきブランドを未来に繋いでいきたい…

白子町中里 御園 弥 さん（農業委員会 会長職務代理者）

「水耕栽培を始めて40年近くになるよ。その間いろいろあったよなあ。」と語る御園さん。今回、農業委員3期目となり、会長職務代理の重責を担っています。水耕ねぎ2,000坪、水稲100aの規模を、妻の由美子さんとともに取り組んでいます。

御園さんが加入する「白子水耕温室組合」は、1980年9月に設立。白子町の水耕栽培のパイオニアとして牽引してきました。2003年に集出荷施設の整備を図り、調整・包装作業を機械化（ライン化）し生産コストの削減を行いました。現在も、“より良いねぎを作るためには”を、常にテーマとして、圃場の調査、減農薬栽培、または、新品種の試作等、組合員みんなで、品質の向上に向けて積極的に取り組んでいます。

これからの農業について聞いたところ、「高齢化に後継者不足など、問題は山積みだと思う。白子町の農業委員・推進委員一丸となって、ひとつひとつ問題に取り組んでいきたい。」と語ってくれました。その横で、農協女性部白子支部長を務める由美子さんが、「農家に嫁いできて、毎日忙しくて、とっても大変！」と話されましたが、その言葉とは裏腹に、夫婦お二人の仲の良さと充実した毎日が覗えました。



【ダッチライト型ガラス温室一面に栽培される小ねぎ】



【最新鋭の選果システムを備えた集出荷場】

○「密播(高密度播種苗移植栽培)」って何だろう？

農家の減少や高齢化が進んでいることから、現在、担い手への農地集積というかたちで稲作の大規模化が進んでいます。規模拡大により作業全体の効率化が図られますが、育苗作業や苗運搬などに係る作業はさほど効率化できないこと。または、育苗ハウスを増棟しなければならず新たな費用が掛かってしまうこと等が、規模拡大を図っていくうえでの課題になっています。稲作の効率化及び費用の削減を図るため、育苗・移植に係る効率化を行っていくことが不可欠です。

こうした課題に対して、「密播(高密度播種苗移植栽培)」への取り組みが高まってきています。苗箱に種子を高密度(250g程度)に播種して多くの苗を育て、その苗を精度よく少量かき取りして圃場に移植する技術です。1箱から多くの苗株を得られることから、10aあたりに必要な苗箱数が9~11箱と大幅に減らすことができ、慣行の育苗と比較して、使用箱数は50%減、育苗管理や苗の運搬、田植え作業に係る労働時間は31%減、原材料費は17%削減できるといった研究結果が出ています。



○密播(高密度播種苗移植栽培)のメリット

- 使用苗箱が少なくなるため、培土、薬剤又は肥料等が削減できます。
- 育苗ハウス施設や資材のコストが削減できます。
- 育苗期間が短縮でき、育苗労力の削減が可能です。
- 苗箱の運搬量や田植機への補給回数を減らすことができ作業時間の短縮が図れます。
- 慣行の移植栽培と同じ育苗機材や機械装備で対応が可能です。

○使用箱数の比較(箱/10a)

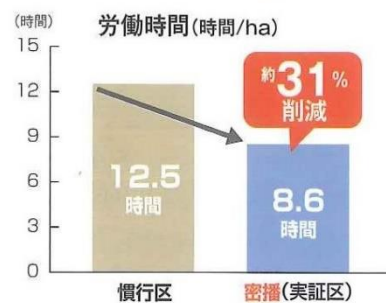
慣行	密播	削減率
18.7	9.3	50%

○労働時間の比較(時間/ha)

作業項目	慣行	密播	削減率
播種	2.5	1.5	31%
育苗管理	4.0	2.0	
移植(苗運搬含)	6.0	5.1	
合計	12.5	8.6	

○原材料費の比較(円/10a)

項目	慣行	密播	削減率
種苗費	1,389	1,074	17%
農業薬剤費	10,374	8,836	
肥料費	4,213	4,213	
その他諸資材費	3,243	1,787	
原材料費計	19,219	15,910	



密播(高密度播種苗移植栽培)は、コスト低減とそれに係る労働力の軽減が図れる等、多くのメリットがあります。しかし、病害が発生しやすい、箱処理剤の効果の低下が懸念される。また、浮き苗(欠株)が出やすいといった課題もまだあるようです。

本町の稲作についても、その取り組みを皆で話し合いを進め、今後も“魅力ある農業”を展開していくことが期待されます。